様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　15　日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006 年 度　～　2008 年 度
課題番号：18730447
研究課題名（和文）
「治療的査定モデル」に基づく心理検査のフィードバックの教育プログラムの開発
研究課題名（英文）
The Development of the program of Therapeutic Assessment system

研究代表者
石川　健介　　（ ISHIKAWA KENSUKE　 ）
金沢工業大学・基礎教育部・准教授
研究者番号：90319038

研究成果の概要：
心理検査を用いた心理査定では，情報収集に主眼をおいた「情報収集モデル」よりも，専門家と受検者が協同して心理的問題の所在を探索する「治療的査定モデル」が推奨されている。本研究では，この「治療的査定モデル」に基づきながら専門家を訓練する心理査定の教育プログラムを開発した。この教育プログラムを修了した専門家は，心理検査を受け，その結果を説明された受検者から，高い評価を得ることが可能となった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,200,000	0	1,200,000
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	2,400,000	150,000	2,550,000

研究分野：臨床心理学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード:心理アセスメント,治療的査定モデル,Therapeutic Model of Assessment, MMPI, フィードバック,

１．研究開始当初の背景

従来，心理検査を用いた心理査定は受検者の特性や問題に関する情報を収集し，専門家（心理臨床家等）が，対象者（受検者）に対する介入方法等の方針を決定するために行われてきた。

それに加えて近年では，検査結果をもとに受検者と専門家が，協同で受検者の心理的問題の所在を探索することにより，症状の軽減，自己効力感の増大，受検者の自己理解の促進といった臨床的に意味のある効果が生じることが示されてきている（Finn & Tonsager, 1992；Newman & Greenway，1997；石川・山上・松本・北村・塩谷，2002；石川・大矢・塩谷，2005 など）。

Finn & Tonsager（1997）は，従来の心理査

定を「情報収集査定モデル」と呼び，検査結果の共有と説明により上記の効果がもたらされる可能性のある「治療的査定モデル」と区別している。「治療的査定モデル」では，検査結果を受検者に単に示すだけではなく，専門家が受検者とともに心理的問題を探索する姿勢が求められる。

したがって，検査結果の説明（以下，フィードバックとする）には心理面接の場合と同等の慎重さが要求される。また，受検者への検査結果のフィードバックは，心理検査の受検者の権利の尊重という点から，重要な研究領域になりつつある。

ところで，この「治療的査定モデル」をいかにして教育･訓練するかという問題は, Finn（1998）の中で提起されている。これまでフィードバック手続きを訓練・教育するという観点からの研究は，ほとんど行われてこなかった。本研究では，フィードバックの教育プログラム方法の開発を目指す。

２．研究の目的

本研究の目的は，「治療的査定モデル」に基づいた心理検査のフィードバックを教育・訓練する効果的なプログラムを開発することである。これまで石川・山上・松本・塩谷（2002）が行ってきた研究では，「当該心理検査についておよそ 10 時間の講習」，「重篤度別のプロフィール解釈」，および「フィードバック・マニュアル（塩谷・石川，1999）に基づくロールプレイ訓練」をフィードバック担当者に課してきた。これにより，フィードバック担当者は，受検者から非常に肯定的な結果を得，しかも担当者間で受検者からの評価にほとんど差がないことが多変量解析の結果，明らかとなっている（石川・山上・松本・塩谷，2002）。

しかしながら，石川他（2002）が行ってきた研究は，5 名の対象者（フィードバック担当者）に対する結果であり，一般性が確認されたとは言いがたい。また Finn（1998）では，フィードバック訓練にボランティアの学生クライエントの協力を得るなどのより実践的なプログラムも提案されている。

そこで本研究では，第一に，これまで一定の成果が得られている申請者らのフィードバック・マニュアルを基本に，その教育・訓練方法に Finn（1998）で提案されている実践的な提案を加え改良し，より効果的な教育プログラムを作成する。第二に，新規のフィードバック担当者にこのプログラムを適用し，フィードバック技能の習得度を受検者の評価を用いて多面的に評価する。第三に，受検者からの評価が，確かに心理検査のフィードバックによるものかを検討して,，最終的なプログラムを完成させる。こういった教育プログラムの開発により，心理検査のフィードバックを習得しようとする専門家に，有益な習得の機会を広く提供することにつながることが期待される。

３．研究の方法

研究 1

参加者　臨床心理士養成コースの修了生 4 名で，修了後すぐに高等教育機関の学生相談部門に非常勤職員として採用された。参加者は大学院において，心理検査に関する講義と演習を経験し，解釈ならびに報告書の作成についての知識は有していたが，実際にこれらを業務として行ったことはなかった。

心理検査　心理検査は実施・採点に関する習得コストと利用できる先行研究の多さを考慮しMMPI新日本版（三京房）を用いた。

手続き

(1) 教育プログラム

表 1 に示すような教育プログラムを作成した。訓練は表 1 に示す段階に沿って行われた。参加者は段階 1 から 3 で MMPI に関する知識を確認し，段階 4 以降ではロープレイを用いた実習により訓練を受けた。ローププレイでは，塩谷・石川（1999）の作成したマニュアルに沿って，以下の各「要素」の適切な実行が求められた。①クライエントを相談室に招き入れる，②説明前の雰囲気作り，③心理検査全般の説明，④個別の心理検査の説明（MMPI），⑤プロフィールの見方の解説，⑥プロフィールから予測される解釈の説明と⑦そ

表１　教育プログラムの段階とその内容

段階	内容	備考
1	MMPI に関する試験 1	Friedman ら（1989）を参考にした問題
2	MMPI に関する試験 2	試験 1 で基準に達しない場合に行う（すべての問題に正答するまで）
3	解釈に関する練習問題	Graham（1977）に記載されているプロフィールで解釈を行う。
4	マニュアルに基づくロールプレイ	塩谷・石川（1999）を使用
5	架空プロフィールを使用した実習 1	いくつかの尺度値が T 得点で 70 を越えていて，低い得点がないプロフィール
6	架空プロフィールを使用した実習 2	いくつかの尺度値が T 得点で 35 を下回っていて，高い得点がないプロフィール
7	架空プロフィールを使用した実習 3	ほとんどの尺度が T 得点で 40～60 の間にあるもの

れに関する対話（質疑応答も含む），⑧最後に感想を求める，である（フィードバックにおける留意点は下記文献を参照）。

(2) 学生ボランティアを対象にしたフィードバック

大学および大学院において臨床心理学あるいは心理学の近接領域を専攻する学生・大学院生を対象に，心理検査の説明を受けるボランティア（以下，学生ボランティア）を募集した。研究の内容を説明し，文書で同意を得た学生・大学院生だけが研究に参加した。学生ボランティアは 20 名で，心理検査のフィードバックを受けた経験はなかった。

評価　フィードバック終了後，学生ボランティアに対し，アンケート調査を依頼した。質問項目は全部で 12 項目だった。

研究２

参加者　臨床心理士養成コースの修了生 2 名であった。研究 1 の参加者と同様に，修了後すぐに高等教育機関の学生相談部門に非常勤職員として採用された。参加者は大学院において，心理検査に関する講義と演習を経験し，解釈ならびに報告書の作成についての知識は有していたが，実際にこれらを業務として行ったことはなかった。

心理検査　研究 1 と同様，MMPI新日本版（三京房）を用いた。

手続き

(1) 教育プログラム

表 1 に示した教育プログラムの段階 3 に続いて，解釈レポート作成の段階を設定した。

これは対象者のプロフィールから解釈を行う際に，対象者に関する理解をより深めるという意図であった。その他の段階については研究 1 と同様である。

(2) 学生ボランティアを対象にしたフィードバック

研究 1 と同じく，心理検査の説明を受けるボランティア（以下，学生ボランティア）を募集した。研究の内容を説明し，文書で同意を得た学生・大学院生だけが研究に参加した。学生ボランティアは 14 名で，心理検査のフィードバックを受けた経験はなかった。

学生ボランティアは，2 種類のフィードバックを受けた。一つはボランティア自身の結果が示されたプロフィールをもとにしたフィードバックで，もう一つはボランティアのプロフィールとは正反対のプロフィールをもとにしたフィードバックである。正反対のプロフィールとは，MMPI プロフィールの T 得点 50 のラインを基準にして，上下の得点を対象の位置にプロットし直したプロフィールを指す。

どちらのプロフィールからフィードバックを開始するか，実施者ごとに同数とした。

評価　フィードバック終了後，学生ボランティアに対し，アンケート調査を依頼した。質問項目は全部で 9 項目だった。

４．研究成果

研究 1 の結果のうち，図 1 に項目 1（説明の理解度），項目 2（説明のわかりやすさ），項目 3（解釈の妥当性），項目 4（説明に費やした時間の適切性），項目 5（自己理解の促進），項目 6（カウンセラーに信頼感をもてたか），

について示す。項目 4 を除いて，5 段階で評定された。いずれの項目も 4 ないし 5 の評定値に近づくほど，高い評価になっている。

項目 1 は説明された内容が，どの程度理解できたかについて尋ねるものである。20 名の学生ボランティアのうち，2 名が「理解できた」と回答し，12 名が「かなり理解できた」と，6 名が「全部理解できた」と回答した。

項目 2 は説明された内容が，どの程度わかりやすかったかについて尋ねるものである。20 名の学生ボランティアのうち，11 名が「わかりやすい」と，9 名が「非常にわかりやすい」と回答した。

項目 3 は説明を受けた解釈仮説が，どの程度自分に当てはまるかを尋ねるものである。この結果，20 名の学生ボランティアのうち，15 名が「かなり当てはまる」と回答し，4 名が「ほぼ全部当てはまる」と回答した。

項目 4 は，説明に費やした時間が，どの程度適切であったかについて尋ねるものである。20 名の学生ボランティアのうち，3 名が「まあ充分」と，17 名が「充分」と回答した。

項目 5 は心理検査の結果の説明を受けて，どの程度自己理解に役立ったかを尋ねるものである。20 名の学生ボランティアのうち，3 名が「多少役に立った」と回答し， 8 名が「かなり役に立った」と，8 名が「非常に役に立った」と回答した。

項目 6 は，カウンセラーに信頼感をもてた程度について尋ねるものである。20 名の学生ボランティアのうち，10 名が「かなり信頼感を持った」と，7 名が「非常に信頼感を持った」と回答した。

学生ボランティアのアンケート調査に対する回答を検討すると，いずれの質問項目でも肯定的な結果が得られていた。本研究の教育プログラムがある程度の効果を有する可能性が示唆された。またこの結果を経験のある専門家のフィードバック結果と比較すると，非常に似通った分布を示していた。本教育プログラムを実施することで，かなりの程度の技能が身につくことが示唆されている。

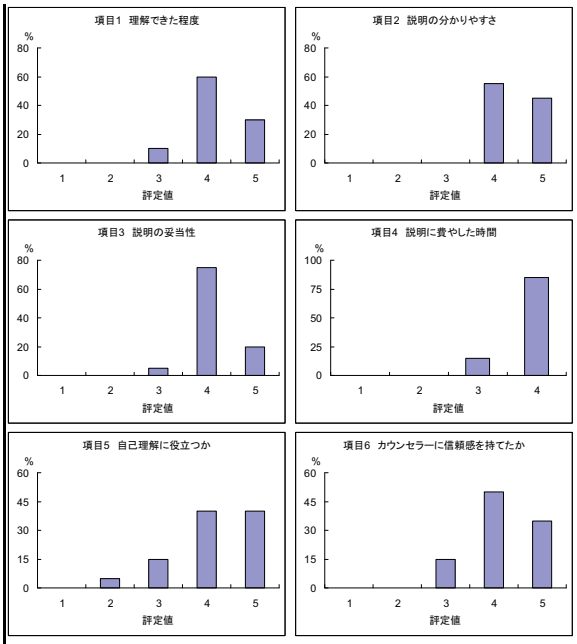

図 1　教育プログラム修了生とフィードバック経験の豊富な専門家との比較

研究 2 の結果を図 2 に示す。図 2 は質問項目 1 から 6 の結果を示してある。質問項目の内容は研究 1 と同一である。ただし，項目 4 は研究 1 の 4 段階評定から 5 段階評定になっている。評定値が 5 に近づくほど，高い評価であることは同じである。

図中，「S」は受検者自身のプロフィールにもとづいたフィードバックであることを示し，「N」は受検者自身のプロフィールとは正反対のプロフィールにもとづいたフィードバックであることを示している。

評定値の結果を見ると，すべての項目で「S」条件の方が，「N」条件よりも高い評価を得ていた（項目 2 のみ等しい）。

さらに，質問項目 3（解釈の妥当性）において，両条件の差が大きくなっていた。説明された内容がどの程度自分に当てはまるかにおいて，受検者は，自分のプロフィールからの説明の方を妥当だと判断していた。

ただし，項目 3 を除いては，条件間の差はわずかである。本教育プログラムによって習得された「説明のわかりやすさ」が受検者の理解を促進し，項目 1 あるいは 2 の評定結果を導いた可能性もある。この結果については，

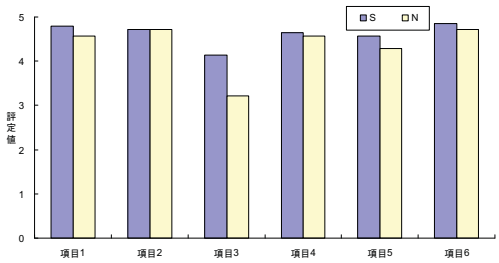

図２　条件ごとの評定値の比較

さらに詳細な検討が必要である。

まとめ

研究１より，フィードバック経験のない臨床家に，本研究の成果をもとに，効果的なフィードバック方法を訓練・教育できる可能性が高まった。

これまで我が国では，フィードバックを習得できるプログラムは組織的に行われていない。心理検査のフィードバックは，今後重要な領域として発展する可能性が大きい。この専門分野に関して本教育プログラムが貢献することが期待される。

また研究２より，解釈の精度が改めて確認された。正確な解釈とそれを伝える適切な方法が必要とされる。

引用文献

Finn, S.E., & Tonsager, M E. 1997 Information-Gathering and Therapeutic Model of assessment: complementary paradigms Psychological Assessment, 9, 374-385.

Finn, S.E. 1998 Teaching Therapeutic Assessment in a required graduate course.

石川健介・塩谷亨 1999 学生相談室における MMPI のフィードバック：被検者の回答から　日本心理臨床学会第 18 回大会発表論文集，p.386-387.

石川健介・塩谷亨 2000 MMPI フィードバックに対する受検者の評定–個人情報の有無が与える影響–　日本心理臨床学会第 19 回大会発表論文集，p.225.

石川健介・山上史野・松本圭・塩谷亨 2002 心理検査のフィードバック担当者の訓練―MMPI を用いて―　日本心理臨床学会第 21 回大会発表論文集，p.335

石川健介・山上史野・松本圭・北村由希・塩谷亨 2002 心理検査の適切なフィードバックがもたらす効果　日本心理学会第 66 回大会発表論文集，p.281.

石川健介・米山直樹 2003 教師および大学院生に対する心理検査のフィードバック　日本心理学会第 67 回大会発表論文集，p.78.

石川健介・大矢寿美子・塩谷亨 2005 心理検査のフィードバックがもたらす効果－フィードバック担当者に対する評価－　日本パーソナリティー心理学会第 14 回大会発表論文集，p.63-64

塩谷亨・石川健介 1999 MMPI のフィードバックマニュアルの紹介：金沢工業大学の例　MMPI 研究・臨床情報交換誌，第 8 号，p.341-342.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 3 件）

① 石川健介・北村由希　心理検査のフィードバック教育プログラム開発に関する予備的検討－学生ボランティアによる評価からの検討（2）－　2008 年 11 月 16 日　日本パーソナリティー心理学会第 17 回大会発表論文集，Pp.250-251　東京

② 石川健介・北村由希　心理検査のフィードバック教育プログラム開発に関する予備的検討－「治療的査定モデル（Therapeutic Model of Assessment）」を目指した教育プログラム－　2007 年 9 月 28 日　日本心理臨床学会第 26 回大会発表論文集，Pp.401　東京

③ 石川健介　心理検査のフィードバック教育プログラム開発に関する予備的検討－学生ボランティアによる評価から

の検討－　2007 年 8 月 25 日　日本パーソナリティー心理学会第 16 回大会発表論文集，Pp.52-53　帯広

６．研究組織

(1)研究代表者

石川　健介（　ISHIKAWA KENSUKE　）

金沢工業大学・基礎教育部・准教授

研究者番号：90319038

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし